



9月市議会報告

排外主義は絶対に許されない

井上議員が一般質問で追及―市に明確な姿勢を求める

9月市議会一般質問で井上議員は、参院選をめぐって拡散された「暮らしが大変なのは外国人のせいだ」とするデマや差別的言説を厳しく批判し、「市として排外主義を明確に否定すべきだ」と迫りました。市長は「DEI宣言（多様性・公平性・包摂性）の中にすべてが含まれている」と答えるにとどまり、議員の主張が際立つやりとりとなりました。

デマに便乗した差別主義を許すな

市長答弁は「DEIに尽きる」

井上議員はまず、参院選で「生活保護が多い」「犯罪率が高い」「税金を払っていない」といった根拠のないデマが飛び交ったことを問題視。「こうしたデマは市民を分断する排外主義そのものであり、決して容認できない」と厳しく指摘しました。

さらに「市内には約750人の外国籍住民が

市長は、人権教育啓発計画に外国人施策を盛り込み、国際交流協会や警察などと連携して取り組んでいると説明。イギリス研修や中国・韓国との交流事業も紹介しました。

しかし、「排外主義そのものを否定する」という言葉は避け、再質問でも「DEI宣言の中にすべてが言い尽くさ

外国人は社会に不可欠

井上議員は再度、「外国人労働者はいまや薩摩川内市にとって不可欠の存在。彼らの増加は国の政策

の結果でもある。それを逆手にとった排外主義・差別主義は絶対に許してはならない」と強調して質問

を締めくくりました。市長が「排外主義」という言葉を避け続ける一方で、井上議員は「はつきりと「市として否定すべき」と主張市政の姿勢をただした。

外国人への理解、もう一度確認してみませんか？

データで見る、誤解されやすい話と事実

最近、外国人や移民に関するさまざまな話を耳にすることがあります。「本当なのだろうか」と不安になる気持ちは、誰にでもあるものです。本記事では、そうした誤解されやすい話を整理し、警察庁や法務省、厚生労働省などの公的資料に基づき事実をやさしく確認していきます。正しい情報を知ることによって、安心して暮らすための判断材料にしていただければと思います。

外国人犯罪は？

「外国人による犯罪が多い」と感じる人もいるかもしれませんが、警察庁の統計によると、外国人の犯罪は全体の数%にすぎず、大多数は日本人によるもので

生活保護・医療費に関する誤解

制限があり、補助金というものはまちがいで、も学費・生活費の範囲に限定されています。外国人の生活保護が多い

こちらくらしの相談所

(No. 623)

携帯 080-

3996-0237

(井上)

なんでもご相談ください。



きく伸びてきています。秋ごろでいいので、再び伐採をお願いできないでしょうか。近隣の住民から要望が出ています。」市の回答

薩摩川内市財産マネジメント課による

と、竹林の抜本的な対策としては法面の吹付処理などが考えられるものの、費用が高額であり、市の厳しい財政状況では難しいとのこと。ただ

し、市はこれまでも要望を受けて伐採対応を行ってきており、今後も定期的に現地を見回り、必要に応じて伐採など適宜対応していくとしています。

ひとこと

住民の声に応えて伐採を実施してきた市の対応に、地域からは感謝の声も寄せられています。引き続き、安全で安心できる公園環境の維持を期待したいところです。



外国人への理解 もう一度確認してみませんか？（1面の続き）

難民申請者について

「難民申請者は全員不法滞在」という誤解もあります。法務省の統計によると、申請者の大半は合法的に手続き中であり、不法滞在はごく一部です。

移民・歴史に関する誤解

「移民を受け入れると治安が悪化する」と

の話もありますが、OECDの統計では移民比率と犯罪率に直接の関係は確認されていません。また、「慰安婦問題や南京事件は嘘」とする主張は、歴史文書や証言で確認されており、全否定は事実と反します（外務省資料）。

DEI宣言とは何か？

DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）宣言は、以下の3つの理念を掲げ、市や組織が「多様性」「公平性」「包摂性」を重視し、それを政策や施策の中心に据えることを約束する宣言です。薩摩川内市でも、8月26日に「心ゆたかな暮らしの実現」のためのDEI宣言を行いました。

エプロンおばさんの簡単フッキング（678）

ちくわとオクラの洋風サッパリあえ

材料（2人分）
ちくわ2～3本。オクラ5～6本、
レモン汁・オリーブ油 各大1～2

作りかた

- ①オクラは塩もみして水洗いし、約1分下茹でて冷水に取り、約1cmの輪切りにする。ちくわは約1cmの輪切りにする。
- ②ボールに①を入れ、レモン汁、塩・こしょう 各適量で味を調える。オリーブ油を入れて混ぜる。

No. 54



映画評と案内 かば（2021年）



かば



6つの顔

9月9日付け南日本新聞に「映画『かば』宮之城で上映中」の記事。さつま町で開催の人権啓発フェスティバルで上映され、11日まで町内の施設で視聴可とあり、みました。「かば」とは200年に58歳で亡くなった中学校教師、蒲益男（かばますお）さんのことです。1989年当時の大阪・西成の公立中学校の生徒教師、保護者をめぐる人間模様を描いています。差別、偏見、貧困。複雑な問題を抱えた生徒と保護者。転校してきたものの登校拒否となるリョウタ。酒浸りで無気力な父親との暮らしで家事を担い、妹の面倒をみるユウコ。父親が服役中で新聞配達をしながら野球に打ち込むシゲル。自分の出身地を恋人にいけない中学校の卒業生ユキ。蒲先生を始め教師たちは、けっして生徒たちを見放すことなく、少しずつ信頼関係を築き、家庭にも出向いて保護者とぶつかりながら向き合います。臨時教員としてこの中学校に赴任した加藤愛先生は2階から机が落ちてくるような荒れた中学校に不安で押しつぶされそうになります。おまけに野球部のコーチに指名され、生徒から「女がコーチなんてみとめられへん！」と拒絶されますが、小柄ながら実はソフトボール大阪代表。痛快です。95%は事実だそうです。荒々しい大阪弁が最初、なじみませんでした。次第にあたたく感じてきました。生きづらさを抱えながらも光を求める心を失わない生徒、それを全力で受け止める先生。いったい教師なのか、わからなくなるような感覚になりました。

ました。40年前の中学校生活を背景とした出来事。うまく言えませんが、人との距離が現在よりもはるかに近かった時代であったと思います。映画を制作した川本貴弘監督は、蒲先生のことを映画にしてほしいと依頼があったものの、会ったことのない人のことを映画にはできないと断ったそうです。当時の同僚教師や生徒の話や、蒲先生のことを映画に残さないといけないと思うようになり、3年間、西成に実際に住んで映画化の準備を進めたそうです。ナレーションは中山千夏。今後の上映予定はわかりませんが、機会があれば、ぜひ。さて、気になる次の映画は、「六つの顔」（2028まで、ガイデンスシネマ）です。



←中俣先生のブログはこちら

中俣先生のつれづれなるままに（807）

現在、住んでいる土地に家が建てられてから50年近くになる。その間、いつの間にかカラスも同居した。カラスの寿命は長くても10年と言われているから、少なくとも五世代にわたってカラスが居ついたことになる。少なくとも書いたのは、あるいはそれ以上の世代交代をしたのかも知れないのだ。というのはカラスは子どもが巣立ちすると、どうやら縄張りを子どもに譲るらしい。ごく最近のことだが、親カラスが二羽の子どもを連れてしばらく遊んでいたが、いつの間にか、子ども二羽置いていなくなった。多分、遊びながらこの人はどうの、残飯捨て場がどうのと教えたのだらう。その学習が予定通り済んで、自分たちの縄張りを譲ったのだ。もちろんカラスに聞いたことではなく私の独断だが。その最後のカラスが見当たらなくなった。どうも、えさ場にもし、遊び場にもしていた川向の田んぼが埋め立てられたことが原因らしい。それまでは数十羽のカラスが群れていたのだが、その姿も見えなくなった。カラスは新しいえさ場へと移動したのだ。これでカラスに邪魔されることなく暮らせると安心もしたが、どことなく淋しさもある。ついでだが、カラスは死期が迫ると、ひと目のつかない、生まれた静かな場所で暮らすらしい。いなくなっても多分そうだったのだらう。それにしてもカラスを追いつめた埋め立て地に、いつかまた建つのだらう。今では草花々だ。（児童クラブ支援員）